

互いを分かり合おうとする思いが 平和な未来を築いていく



独立記念館の前で。



日本の植民地時代、独立運動の起点となったタブコル公園を訪れました。

グリーンコープでは、平和の取り組みの一環として、日本と韓国の過去の歴史を知り、未来へ向けて市民が連帯することを目的に、毎年組合員が韓国を訪れています。
今年25回目を迎えた「ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋)韓国への旅」に、9人の組合員が参加しました。参加した組合員は、日本による侵略の歴史と向き合い、韓国の生協組合員との交流を通して市民同士の連帯を確認することができました。

参加した組合員の感想を紹介します。

韓国での行程

- 8月30日 独立記念館見学
8月31日 景福宮見学
国立民俗博物館見学
タブコル公園見学
西大門刑務所歴史館見学
京東市場散策
9月1日 ハンサリム東ソウル生協との交流
ハンサリム生協店舗見学



独立記念館では、民衆の独立運動について学びました。



ハンサリム東ソウル生協の皆さんと交流しました。



西大門刑務所歴史館で、収容された人々の写真に見入る参加者。

歴史の痛みを語り継ぎ、 違いを超えた市民の連帯を。

グリーンコープやまぐち生協

理事長 松本あいらさん

今回の旅では、独立記念館や西大門刑務所歴史館、タブコル公園といった史跡を訪れ、日本の加害の歴史を正面から学ぶことができた。奪われ続けた言葉や文化、土地や命、それに抗し続けた民衆の強さを知り、歴史が「民衆の物語」として受け継がれていることを実感した。展示や記念碑は単なる過去の記録ではなく、現在を生きる市民に問いかけ続けている。そこから私は「不戦」を貫くという平和の原点を強く受け止めた。

また、ハンサリム東ソウル生協との交流は、未来への連帯を実感できる場となった。自己紹介や歌、手作りの昼食を通じて迎えてくださった皆さんの温かさに触れ、同時に「一人ひとりが生協を担う主体である」という誇りを感じた。理事に生産者が加わっていることも印象的で、生産から消費、環境保全までを一体として考える姿勢は、私



ハンサリム東ソウル生協からのお土産を、代表して受け取る松本さん。(写真右)

たちグリーンコープとも共通していた。店舗見学では、お米をシンボルとし、産直商品やリサイクル活動が生活に根ざしていることを確認できた。買い物するだけで理念に出会える空間づくりは、

組合員に自覚と喜びをもたらしている。
今回の訪問で学んだのは、歴史の痛みを忘れずに語り継ぐことと、違いを越えて市民が連帯することの大切さである。過去を直視することは容易ではないが、それを避けては真の平和は築けない。韓国の民衆が示してきた強さとしなやかに学びながら、私たちも平和の担い手として歩みを続けていきたい。学びを組合員どうしで共有し、平和学習や交流の場を広げていくことこそ、グリーンコープの平和活動をより豊かにする具体的な一歩になると考える。

市民同士の交流を続け、お互いを理解し、 これからの関係について考えていきたい。

グリーンコープ生協くまもと
東地域本部 地域理事長 株元知子さん

普通の観光旅行やガイドブック、韓流ドラマなどでは知ることのできない、本当の韓国を深く知ることができたこと、そして戦後80年という節目の年に参加できたことに感謝しています。

韓国の人たちがなぜ、未だに日本を許せないと思っているのか…その部分を少しだけかもしれないが理解できた気がします。しかし、本当に理解できるかというと、そうではない気もします。それは、侵略した側と侵略された側だけ



西大門刑務所歴史館の前で。一番右が株元さん。

ている子どもがいました。お父さんは、笑いながら子どもに何かを言っていました。子どもの思いや、お父さんが何を思っているのか、本当のことは分からないかもしれないと思いましたが、自分も日本人だと知られたくないような複雑な気持ちになりました。また、日本語の説明を聞いている私たちの後ろを韓国の人が通って行かれるとき、どう思われているんだろう？と少し怖くなりました。そのことをハンサリム東ソウル生協との交流の時に話すと「私たちは国に謝ってもらいたいと思っている。あなたたちに恨

みはない。大丈夫だよ」と言われ、少し安心し救われた気がしました。市民同士の交流を続け、お互いを理解し、これからどういった関係を築いていくのか、していかなければいけないのかを考えていけたらと思います。

近くて遠い国とはよく言ったもので、文化的にも似た部分はあるけれど、同じではないし、知らないことも多くありました。K-POPやファッション、メイクやドラマなど輝く光の部分に隠れた影の部分、くすぶっている何かを、まずは身近な人たちに知ってもらいたい、一緒に考えていけたらと思います。